

『ボードレール』におけるサルトル的戦略

重見晋也

序論

サルトルによるボードレール論は、1945年の *Confluences* 誌上に «un Collège spirituel» というタイトルの下に、次に1946年、*Les Temps Modernes* 誌上に «Fragment d'un portrait de Baudelaire» として断片的に発表された後、同1946年にボードレールの *Écrits intimes* (これは Point du Jour から出版されたもので、*Fusées*, *Mon Cœur mis à nu*, *Carnet*, *Correspondance* が収められていた) への序文として、はじめて全文が刊行され、翌1947年に『ボードレール』というタイトルの下、独立して出版された¹⁾。

『ボードレール』は、出版された当初から、G.ブラン、G.バタイユやM.ブランシヨらから激しく批判されたのであるが²⁾、批評の各々において程度の差こそあれ、彼らの一致した意見によれば、サルトルは詩人をその作品とは全く関係のない道徳という観点から断罪している³⁾、というものであり、バタイユに至っては、サルトルは自覚することなくそうした断罪を行ったのだ⁴⁾、とまで述べている。これらの批評家たちに共通しているのは、サルトルのボードレール論を、ボードレールという一詩人に対してなされただけのものではなく、詩全体に対して向けられた道徳的断罪であると捉えているところにある。近年では、こうした議論を認めつつ、サルトルの詩人に対する唐突で直観的な批評が、一方で父を早くして失ったことへの共感に根ざしていると同時に⁵⁾、他方においては、詩人の批評に仮託したサルトル自身の道徳的思想の展開である⁶⁾、とされるに至っている。

ところで、第二次世界大戦終了後のサルトルの執筆を特徴づけている活動の一つが、批評作品、『存在と無』の中で提示された、いわゆる「実存的精神分析」の手法による一連の作品群であるとすれば、サルトルのボードレール論は、『聖ジュネ』、『マラルメ』、『家の馬鹿息子』、あるいはここに自伝である『言葉』を含めることもできるだろうが、そうした作品群に先立つ、はじめての本格的な批評作品として位置づけられる⁷⁾。

物語における冒頭部分はその物語にとって重要であるのと同じく、新たな分野へと作家がその創作活動を広げるときに、その第一作目が重要な価値を持ちうると思うならば、『ボードレール』は、それ以降のサルトルの批評作品の原型ともいえる側面を有していると思うこともできるのであり、それ故、この作品は必

ずしも詩に対する敵意だけに突き動かされて執筆されたものではないように思われる⁹⁾。

しかしながら、確かに、サルトルが『ボードレール』の執筆によって、詩人を道徳の点から断罪し、それを自らの道徳論の礎にしようとしたという指摘は有効性がある以上、われわれとしては、如何なる方法によってどのような意図をもって、またサルトルがこの批評作品を執筆したのか、ということを明らかにすることが必要であるように思われる。また、サルトルは『ボードレール』の冒頭において、ボードレールのイマージュを、具体的な説明を廃するかたちで読者に提示しており、サルトルの意図において重要な役割を担っていると見なすことができる。それゆえ本論においては、こうした問題意識のもと、サルトルが詩人を読者に提示する方法とその意図という点に絞って、主に作品の冒頭を対象として考察していく。

1. 第一の戦略

当初 *Écrits intimes* への序文として刊行されたという経緯があるためであろうか、ボードレール論の構成は、明確な章立てというものが欠如しており非常におおざっぱなものである⁹⁾。事実、刊行された作品に「目次」は見あたらない。しかしながら、テキストは一行文の空白によって明らかに二つの部分に分けられている。すなわち、第一部 (pp.17-124) において、サルトルは主として書簡に依拠しつつ、ボードレール像を再構築しようとし、第二部 (pp.124-245) においては、第一部において自ら生みだしたボードレール像を、詩人の「詩的事実」(p.124) の中に確認しようとしている。すなわち、この批評作品には、独立した序章や結論のようなものは廃されているのであり、第一部の39行にわたる最初の段落や第二部の最後の10頁がそれらに代わる機能を果たしていると考えることができる。

i) 「固定観念」

作品の序章にあたる部分は、『ボードレール』におけるサルトルの戦略を考察する上で重要な役割を担っている。ボードレール論は、一つの「マキシム」あるいは「固定観念」の提示によって始められている。

«Il n'a pas eu la vie qu'il méritait.» De cette maxime consolante, la vie de Baudelaire semble une illustration magnifique. Il ne méritait pas, certes, cette mère, cette gêne perpétuelle, ce conseil de famille, cette maîtresse avaricieuse, ni cette syphilis — et quoi de plus injuste que sa fin prématurée ? Pourtant, à la réflexion, un doute surgit :
[...]

(p.17)

「彼は自分に備した生涯を送らなかつた」。サルトルは先ず、こうした固定観念がボードレールの人生を見事に形容しているという仮定に立脚して、「あの母親、あの不断の不如意、あの家族会議、あの欲ばりの情婦、さらにはあの梅毒」そして「早すぎる死」と、その論拠を続いて列挙している。こうした列挙は、「certes」という言葉が示しているように、列挙される前からこれらの要素が論拠となり得ないことを暴露してしまっているのであるが、そうであつてなお、ボードレールの詩人としての偉大さから判断すれば、詩人の人生のネガティブな側面を構成しているものとして列挙されている、彼と「母親」との関係、人生を通じて「不如意」だったこと、家族会議、吝嗇な恋人や梅毒が、ボードレールにふさわしくないことを、読者に一方的に喚起するという役割を、これらの列挙された要素は果たしている。

ところで、こうした詩人の人生のネガティブな要素は、指示形容詞とともに列挙されている。これらの指示形容詞は、テキストの冒頭で用いられているのであり、それらは前述された内容の中に指し示すものを持たない。しかし、『ボードレール』（あるいはボードレールの *Écrits intimes* という作品）を前にしているという言表の状況が示しているように、読者はそれらの列挙された要素がボードレールの人生の構成要素であることを理解するに至るのであるが、それらの要素、母親との関係や家族会議のことなどは、これらの列挙に続く部分においては具体的な説明を付されていないのであつて、作品の冒頭において読者は、いわば詩人のイマージュに出し抜けに直面することになるのである。このように列挙されたボードレールにまつわるイマージュの参照元は、具体的な説明が直ぐには付されていない以上、テキストの外に、換言すれば、読者の知に直接働きかけるところにある、ということが理解される。故に、こうしたサルトルの手法は、読者がある程度詩人の人生についての知識を有していようとなかろうと、列挙された要素の暗示によって、詩人のネガティブな側面を読者に否が応でも想像させるという機能を持つものである。

ii) アナフォル

このようにしてサルトルは、ボードレールのネガティブな人物像を、作品の冒頭から一挙に提示しているのであるが、同様の手法は、指示形容詞の使用とは別に、アナフォル¹⁰⁾というもう一つのレベルにおいても考察される。

[...] : ce pervers a adopté une fois pour toutes la morale la plus banale et la plus rigoureuse, ce raffiné fréquente les prostituées les plus misérables, c'est le goût de la misère qui le retient auprès du maigre corps de Louchette et son amour pour «l'affreuse Juive» est comme une préfiguration de celui qu'il portera plus tard à Jeanne Duval; ce

solitaire a une peur affreuse de la solitude, il ne sort jamais sans compagnon, il aspire à un foyer, à une vie familiale, cet apologiste de l'effort est un « aboulique » incapable de s'astreindre à un travail régulier; [...]. (pp.17-18, 強調筆者)

作品の冒頭のネガティブな列挙というのは、いずれにせよ、否定されるべき要素であったのだが、それに続くアナフォールの列挙においては、冒頭に取り上げられた「固定観念」が示すところとは反対に、ボードレールの人生が彼にふさわしいものであったことの論拠が示される。そこにおけるボードレール像は、「ce pervers」「この悪人」、「ce raffiné」「この洒落者」、「ce solitaire」「この孤独者」さらには「cet apologiste de l'effort」「この努力の擁護者」といったアナフォリックな表現において、読者に提示される。ここにおいても、指示形容詞を認めることができるが、これらの指示形容詞は、前述した場合とは異なり、テキストの中において「Baudelaire」という指示する内容を持っており、その点において、それらの後にくる名詞を「Baudelaire」に結びつけるというはっきりとした役割を担っている。

ここで問題となるのは、むしろ名詞の方である。ボードレールは「l'homme」といい換えられた後 (p.17), 立て続けに「pervers», «raffiné», «solitaire», «apologiste de l'effort」と敷衍されている。前述したネガティブな列挙と同様に、確かに読者はここにおいてそれらがボードレールを指すということを理解するのであるが、しかし何故、そしてどのような点において、ボードレールがそれらの名詞によっていい換えられ得るかに関して、サルトルは全く説明を与えていない。無論、サルトルの本論においては、「悪人」ボードレールについての説明がなされはするのだが¹¹⁾, そうした判断は、単にボードレールの実生活、あるいは詩から導き出されたものではなく、ボードレールが根元的な態度として「悪」を自ら選択したというサルトル自身の仮定に依拠し、「実存的な精神分析」を行使することによって導き出されたものであって、サルトルは、作品の冒頭において一挙に命名したボードレール像を出発点として、論を進めているのである。

よって、このアナフォールというレベルにおいても、冒頭において詩人についてサルトルが提示したイメージは、前述したネガティブな列挙の場合と同様、読者に対して一方的に押しつけられているのである。

iii) «fameux»

作品の冒頭における、このような読者をテキストへと強制的に引き込もうとする戦略は、作品の本論においても、形を変えて用いられているのであって、それは「fameux」という形容詞の使用に見ることができる。

La fameuse lucidité de Baudelaire n'est qu'un effort de *récupération*. (pp.29-30)

Car, en dépit des ruses que nous énumérons tout à l'heure et qui ont tissé la figure qu'il [=Baudelaire] a prise à nos yeux pour toujours, il sait bien que son fameux regard ne fait qu'un avec l'objet regardé, qu'il atteindra jamais à une possession véritable de lui-même mais seulement à cette languissante dégustation qui caractérise la connaissance réflexive. (pp. 32-33)

Car cette bestialité de l'homme — comme son angélisme [=de Baudelaire] — il faut l'entendre au sens fort : il ne s'agit pas seulement de la trop fameuse faiblesse charnelle ou de la toute-puissance des bas instanctes : Baudelaire ne se borne pas à recouvrir d'une image colorée un sermon de moraliste. (p.46, いずれも筆者強調)

«fameuse lucidité」「かの有名な明晰さ」、*«fameux regard»*「有名な視線」、*«trop fameuse faiblesse charnelle»*「あまりにも知られすぎている肉体的な脆弱さ」、あるいは第一部の結論に当たる部分で述べられる *«fameux “dolorisme”*」(p.110)、これらの *«fameux»* は、前述した指示形容詞やアナフォルの様に、ボードレールのネガティブな側面を喚起するというものではないにしろ、それらは読者側に自明の理として、やはり一方的に提示されているのであって、また、*«fameux»* という形容詞の付された名詞は、サルトルのテキストの中で説明されているものではない以上、それらは詩人に対してつくられたイメージを読者へと押しつけるものとして働いているといえる。さらに、これらの名詞は、そこから発してボードレールの人生の各々の側面を説明するために用いられているのではなく、サルトル自身が行う解釈との対照性を浮かび上がらせるために用いられているのである。

そうであるが故に、それらの名詞を含む文章は、多少なりとも否定的なニュアンスを含んでいる。最初に引用した一節においては、「かの有名な明晰さ」が、「回復の努力にしかすぎない」とされるのであるが、その後続く部分では、このボードレールの「回復」が、*«se voir»* や *«se recouvrer»* といった再帰動詞に換言されることによって、詩人の「どこまでも主観的な形態」(p.23) を強調しつつ批判している。

こうしたサルトルの第一の戦略というのは、テキスト外への参照を用いているという点において、読者側のテキスト解釈への参加をより意図的に促すものであり、そのようにして読者との共犯関係を作り上げることによって、自らの論旨へと読者を誘い込むようなものとして捉えることができる。

II. 「悪循環」としてのボードレール像

サルトルは、第一の戦略に基づいて、できあいのボードレール像に反駁を加え

ていく。前述した「苦悩主義」の他にも、詩人のキリスト教的教育の影響 (p.60)、オイディプス・コンプレクスによって作りなおされた詩人像 (p.67)、マゾシズム (p.69)、無神論 (p.71)、さらには『悪の花』の出版差し押さえ訴訟 (pp.77-78)、これらのボードレール像の各々が、サルトルによって一つ一つその根底を揺るがされていくのであるが、こうした反駁は作品の前半に集中してあらわれてくる。すなわち、これらのイメージの各々は共通して、提示されるや否や、その反証があげられるのであって、固定されたイメージだけでは説明できない詩人の一面が読者に対して喚起されるのである。

サルトルによって提示される詩人のできあいのイメージの中からキリスト教教育の影響を例に取れば、サルトルは、そうした教育がボードレールに深く刻み込まれていることは認めながらも¹²⁾、同じくキリスト教に深く影響された別の作家A.ジッドを比較の対象としつつ、ボードレール人間性をモラルの観点から批判している。すなわち、性的な異常さと一般的なモラルとの間に挟まれてなお、ジッドは断固として前者の方を選び取り、他者からの受け身の「善」の概念を甘んじて受け入れることは決してなく、「自らの」モラルを産み出すことに成功したとされる。「ジッドは、自らを解放できるのは善と悪との根本的で無償の発明によってのみであるということを理解した」«il [=Gide] a compris qu'il se libérerait seulement par l'invention radicale et gratuite du Bien et du Mal.» (p.60)。ジッドのこうした生き方と比較して、サルトルは、ボードレールの態度に対して、文字どおり疑問を投げかけている。

Pourquoi Baudelaire, créateur-né et poète de la création, a-t-il usé ses forces et son temps à maintenir les normes qui le faisaient coupable ? Comment ne s'est-il pas indigné contre cette hétéronomie qui condamnait au départ sa conscience et sa volonté à demeurer pour toujours une mauvaise conscience et une mauvaise volonté?

(pp.60-61)

キリスト教的精神に深いところで裏打ちされながらも、そこから個人的ではあるが新たなモラルを打ち立てたジッドとは異なり、ボードレールは「規範」を保持しようとし「他律性」を甘んじて受け入れているとされるのであるが、詩人に対するこうした批判の裏には、「生まれながらの創造者であり創造の詩人」というボードレール像に対する、サルトルの疑いのまなざしが、連続して繰り返される二つの疑問文に明らかに見て取れる。そして、そうした詩人の態度は、「後ろめたさと不誠実さ」として断罪されているのである。言葉は違うが、この「後ろめたさと不誠実さ」という言葉は、サルトルが人間存在を弾劾するときに用いる「自己欺瞞」«mauvaise foi»¹³⁾と通じるものであり、サルトルの批判の激しさが強調さ

れている¹⁴⁾。

このような戦略に基づいて、サルトルが読者に対して押しつけようとしている詩人像が明らかになってくる。

すなわち、サルトルによれば、ボードレールは、父の死と母の早すぎる再婚を機に寄宿舎に入れられることになるが、そのことによって、彼自身告白しているように、自分と他者との「違い」を感じとり¹⁵⁾、根源的に「孤独であること」を選択し、自らの罪深さを感じるようになる。

«Sentiment de solitude, dès mon enfance. Malgré la famille — et au milieu des camarades, surtout — sentiment de destinée éternellement solitaire.» Déjà il pense cet isolement comme une destinée. [...] Nous touchons ici au choix originel que Baudelaire a fait de lui-même, à cet engagement absolu par quoi chacun de nous décide dans une situation particulière de ce qu'il sera et de ce qu'il est. (p.20-21.)

この根源的選択から発して、ボードレールの人生は再構築されることになるのであるが、その中でも「Bien」と「Mal」とは、詩人の人生だけではなく、例えば *Les Fleurs du Mal* というタイトルに象徴的に表されているように、ボードレールの創作活動を特徴づけている二つの概念であるとされる。

先ず第一に「善」に関していえば、それは次章において「同化」と我々が呼ぶところのものによって特徴づけられる。それは、ボードレール自身が求める特異性を確認するために必要なものであるとされる¹⁶⁾。特異性は、彼の孤独に対する志向から直接生まれるものなのであるが、具体的には、詩人にとっての「善」は彼を監督している人々のまなざし、「他者のまなざし」であって、こうした他者から注がれるまなざしは、詩人にとっては絶対的な「善」としての力を持つ¹⁷⁾。

ところで、このように他者のまなざしと混同される「善」は、しかしながら、例えば詩人にとって「善」を体現している母親のまなざしとの関連で考えた場合、詩人が母親に対してわざとらしい苦悩の手紙を数多く宛てている以上¹⁸⁾、ボードレールが「善」としての母親を苦しめ、いわば「犯そう」(p.122)としているのだ、とサルトルは述べている。このようにして提示されるボードレールにおける「善」は、一方で目標としてめざされるものであるとともに、他方においては、自らの特異性への意志によって、「犯されるべき」ものとして、その二重性によって特徴づけられる。

さらに、ボードレールにおける「善」は、以上のような静的な二重性という関係性を離れて、より動的なものとしても捉えることができる。すなわち、他者との相違と罪悪感とを自らの本分としたボードレールは、自らの特異性を絶対的なものとし、その特異性ゆえに、罰せられることを望むのであるが、サルトルによ

れば、「明晰さ」を持ち合わせているボードレールは、そうした自らの特異性が他者によってしか確認されないものであることを十分に理解しているのである¹⁹⁾。他者によって受動的にのみ与えられる特異性から逃れるため、詩人が自らの自由を取り戻そうとしたとしても、そのようにして求められる自由こそ、「罪深くある」という自由以外の何ものでもない。そうであってなお、ボードレールは、再び自らの特異性を他者のまなざしによって成就しようとする。絶対的な罪悪感を求めるボードレールは、それが実現不可能なことを知りつつなお、それを求めていくのである。

ところで、こうした永遠の繰り返しという図式は«Bien»と«Mal»との関係にも内在している。ボードレールは、自らの自由意志により罪悪感を求めながらも、他者によって予め与えられた価値を自らのうちに内面化させ、それによって自らの責任を制限しようとする。この矛盾した状況から、ボードレールは悪を選びとるに至る。しかし、詩人が自ら悪であることを選びとったとしても、サルトルにとっては「人間が真に悪であることはできない」以上、そして悪というのが他者によってしか悪と認められない以上、悪を選ぶということは他者が善と認めるところと反対のものを選びとることに他ならない²⁰⁾。それ故、悪は常に、善との関係性の中で現れるものなのである。このようにしてボードレールの悪は、サルトルのまなざしによって、善との関係において循環を始める。

ボードレールは、善を犯すことによって、また、自らの怠惰で他者から借りたモラルによって、善を支配しようとすると同時に、そうであってなお、善、すなわちオピック夫人や他者として具現化された善に意識的に従おうとする。しかし、罪悪感を求めるという根源的な選択のために、詩人はこうした状況に満足することができない。そこで、ボードレールは他者から与えられた罪悪感から逃れて、能動的に罪悪感を獲得しようとするのである。しかし、そのようにして獲得される罪悪感もまた、他者から与えられたものでしかない。これこそがまさに、「矛盾する二者選択」(p.65)であり、ボードレールの「悪循環」(p.79)なのである²¹⁾。

III. 第二の戦略

ところで、これまでの語単位のレベルについての考察から離れて、文章のレベルに目を移してみると、読者との共犯関係の樹立を目的とした戦略に並行する、もう一つの戦略が浮かび上がってくる。それは、第一の戦略が目指したような、読者に対してある特定のイメージを押しつけようとするものではなく、むしろそれと対立するような、読者との共犯関係の樹立を妨害するような戦略である。しかも特筆に値するのは、第一の戦略とは対立関係にあるかに見えるこの第二の戦略が、第一の戦略と共存しているという点である。すなわち、本論I章i)において引用したアナフォリックな名詞を含んだ4つの文を、第一の戦略の軸として展開す

ることによって、サルトルが読者との共犯関係を樹立していることについては前述したが、それらの文を省察した場合、各々の文がアナフォールを敷衍することによって、一つの対立関係を形成するに至っていることをわれわれは確認することができる。また、それら4つの文は、4つの類型に分類することができるのである。

先ず第一に、「pervers」といい換えられたボードレールは、「最も通俗で、しかも厳格なモラルを断固として採用した」と述べられる。「pervers」としてモラルに反して行動していたとしても、詩人は一般的な意味でのモラルを身につけたされるのであり、そこにおける対立的なイマージュは明らかである。さらに、このようにして表された対立関係は«une fois pour toutes»という言葉によって強調されるとともに、「morale」という言葉に続く二つの最上級«la plus banale et la plus rigoureuse»という言葉によっても強調されている。これは、換言すれば、自らの持つ価値とは反対の価値を取り込もうとする動きであり、「内面化」の運動として定義づけることができるかもしれない。

次に、「raffiné」という語は、詩人のdandyとしての側面を読者に対して提示していると考えることができるのであるが、このdandyはその上品さを以て「最下等の娼婦たち」«les prostituées les plus misérables»の下に足繁く通っているとされる。ここにおいても、詩人の二つの相反する価値が、一つの文の中で提示されている。前述した第一のアナフォールの場合と同様に、ここにおいても最上級におかれた形容詞«les plus misérables»が、これら二つの価値の差異を強調している。さらに、この文においては、形容詞«raffiné»から派生した名詞を用い、形容的な含意をその名詞に持たせることによってまた、後にくる«misérables」という形容詞との差異が強調されているのである。ところで、ここにおいて確認される図式は、第一のアナフォールにおいて確認された「内面化」という運動とは異なり、「fréquente」というtransitifの動詞が示しているように、ボードレールが持っている価値から別の価値へと移動することが問題になっているのであり、ここにおいてサルトルは、詩人が売春婦たちの価値に自らの価値を「同化」させようとしている、と捉えているのである。

«solitaire」としてのボードレールは、現在の自分に満足することができず、むしろ「孤独を極度に恐れ」«une peur affreuse de la solitude»たとされるのであるが、ここにおいても我々は、ボードレールの二つの価値の共存を読みとることができる。ここにおいて提示された「孤独者」と「孤独に対する恐怖」という二つの価値は、前者二つのアナフォールの場合とは異なり、「逆説」的關係をなしている。こうした「逆説」的關係というのは、名詞«peur»に付された形容詞«affreuse»によって強調されることで、「孤独者」が「孤独」に対して抱いている「恐れ」とは、単なる「恐れ」ではなく「極度の」と、その程度の大きさが示されている。また、「solitaire」

と«solitude」とは、同じ意味論的領域に属しているのであるから、互いに互いを否定しあうかたちにおいて一つの文章の中で提示されることによって、「孤独者」と孤独に対する「極度の恐れ」という二つの価値の間の「逆説」的關係は、より強調されることになる。

最後のアナフォールを含む一文は、その他の場合と比較した場合、より重要なものであると考えることができる。「apologiste de l'effort」が「定職に腰を据えることのできない『いくじなし』と同一化されているのであるが、ここでも一つの対立関係が問題となっているのは明らかである。というのも、「努力」が万難を排して一つのことに取り組む姿勢によって特徴づけられるとするならば、そうした「努力」の「擁護者」が、決まった仕事に就いていられない「いくじなし」とされているからである。この「擁護者」と「いくじなし」との同一化は、動詞«être»を介して行われているのであるが、そのことによって、詩人がこれら二つの矛盾する価値を、同時に体现していると考えられるのであり、その意味において、サルトルが「矛盾」した人物としてボードレールを捉えている、とみなすことができるのである。ここにおいては、問題となっている二つの価値の一方から他方への運動性、すなわちボードレールの外から内あるいは内から外という一方向への運動性が問題になるのではなく、またそれらの二つの価値が互いに互いを否定しあうのではもはやなく、それらは矛盾したまま共存しているのである。

以上のようにサルトルは、詩人ボードレールを、「内面化」、「同化」、「逆説」そして「矛盾」という4つのタイプに分類することのできるイマージュの中で、読者に提示している。これらのタイプの各々は、共通して、二つの相反する価値の間の関係性を示しているのであるが、前者二つのタイプが、対立関係を表しつつも一方から他方への関係性のみを示しているのに対して、後者二つにおいては、二つの価値が互いに影響を与えあうような関係性を持っている。それはすなわち、「孤独者」にして「孤独を恐れる」といった、同じ意味論的領域に属しつつ、一方が他方のアンチ・テーゼとしての価値を持つような「逆説」的關係の中にも見ることができるし、また、「努力の擁護者」が「定職に就いていられない『いくじなし』とされるような、二つの対立する価値の「矛盾」した共存にも認めることができる。

ところで、既に見たように、サルトルはボードレールを、こうした二つの価値の間の運動性、すなわち「悪循環」として提示する。「悪循環」としてのボードレール像、これこそがサルトルがボードレール論の中で明らかにしようとしているものであった。それゆえ、こうした観点からすると、第一の戦略が、サルトル的直観を読者に押しつけるという役割を担っていたのに対して、第二の戦略は、作品の冒頭において行使されることによって、最終的に述べられることになる「悪循環」としてのボードレール像を根拠のあるものとするという役割を担っているの

である。すなわち、我々が4つのタイプに分類した相反する価値の間の関係性は、形を変え作品の中に盛り込まれているのであって、いわば作品全体の意図を予め具現化していたのである。

善と悪、現在と過去、自然なものと人工的なもの、これらのものすべてが、二つが一つになって組をなし、そして、互いに互いを否定しあいながらも、それぞれの価値は決して失われることはない。このようにしてサルトルは、*Mon Cœur mis à nu*でボードレールが述べている、「一方が神へと向かい、もう一方がサタンへと向かう、二つの同時の嘆願書」*«deux postulations simultanées, l'une vers Dieu, l'autre vers Satan»*²²⁾という言葉の中に、「transcendance」と「transdescendance」という互いに補完しあう二つの運動を見ているのであり、また、*Les Fleurs du Mal*に収められている「L'Héautontimorouménos」「我とわが身を罰するもの」で述べられた「われは傷にして短刀／犠牲者にして処刑者なり」「Je suis la plaie et le couteau / Et la victime et le bourreau.»²³⁾にも、同じような両立を見て取っているのである。

結論

サルトルのボードレール論が、『存在と無』の中で示された「実存的精神分析」に基づいて書かれている以上、さらには、冒頭の固定観念の主語「Il」が、「les hommes」へといい換えられて再提起され、そしてさらには結論において「l'homme」といい換えられていること、あるいは、「自由」、「存在」、「現実存在」といったサルトル的用語が頻出することを考えるとき、このボードレール論が個別な作家研究という枠を超えて、いわゆる存在論的射程を持つものとして理解されうることが明らかであろう。しかし作品を全体として見たとき、その構成が、固定観念の提示によって始まり、それとは反対のところを確認するに至るというものであることを考えるとき、サルトル的な戦略の一つとして、一般性を絶えず疑問に付していこうとする姿勢を見ることができ、そしてこうしたより大きな戦略の体現として、今回われわれが考察した二つの戦略を位置づけることができるように思われる。その観点からすれば、ボードレールが先ず最初にサルトルの「実験台」に乗せられたことが理解できるであろう。すなわち、詩人たちに絶大で揺るぎない影響力を行使していたボードレールの神話が問題だったのである。

以上のように、主としてサルトルのエクリチュールに着目して、サルトルの描き出すボードレール像とその戦略を導き出したのであるが、『ボードレール』の中で、サルトルが詩人の作品をどのように理解しているのかを見ることが、これからの課題であるといえよう。

注

- ¹⁾ Michel CONTAT et Michel RYBALKA, *Les Écrits de Sartre*, Gallimard, 1970, p.143.
- ²⁾ 各々の批評については以下を参照: Georges BLIN, «Jean-Paul Sartre et Baudelaire», in *Le Sadisme de Baudelaire*, José Corti, 1948, pp.103-140; Georges BATAILLE, «Baudelaire», in *La Littérature et le mal*, dans *Œuvres complètes*, tome IX, Gallimard, 1979, pp.189-209 (*Critique* 8-9, 1948 に初出); Maurice BLANCHOT, «L'Échec de Baudelaire», in *La Part du feu*, 1949, pp.133-151.
- ³⁾ G. プランは、例えば、次のように述べている: «Comme l'a dit Georges Bataille déniait à notre censeur [=Sartre] le droit de s'ériger en arbitre du sens ou du non-sens d'une vie d'artiste, cette Introduction apparaît à bien des égards comme un acte d'agression morale dirigée contre la poésie en général.» (BLIN, *op.cit.*, p.124) また、断罪に関しては、トドロフは、批評の対象としている作家とサルトルとの対話の一方的な断絶を問題にしている (Tzvetan TODOROV, *Critique de la critique*, 『批評の批評』, 及川馥／小林文生訳, 叢書・ウニベルシタス 344, 法政大学出版局, 1991, p.89参照)。
- ⁴⁾ 例えば、G. バタイユは、«Sans en avoir eu l'intention, Sartre a lié [...] le problème moral à celui de la poésie» (*op.cit.*, p.191) と述べている。
- ⁵⁾ Cf. André GUYAUX, «L'Intellectuel contre le poète — Sartre et Baudelaire», dans *mesure* numéro 2, José Corti, 1989, pp.41-46.
- ⁶⁾ Cf. Jean-François LOUETTE, in *Silences de Sartre*, Presses Universitaires du Murail, 1995, p.268 (*Magazine littéraire*, 1989, vol.9, ボードレール特集号に初出) 同様に Auguste ANGLÈS, «Sartre contre Baudelaire», in *Circumnavigations, littérature, Voyage, Politique 1942-1983*, Presses Universitaires de Lyon, 1986, pp.138-144.
- ⁷⁾ 少なくとも T. トドロフは『ボードレール』を一番批評らしい作品として位置づけている。(Cf. TODOROV, *op.cit.*, p.91.)
- ⁸⁾ 実際に、サルトルは作品の中でボードレールとランボーとを比較して、ランボー的な «Je est un autre.» とボードレールの «Je suis un autre.» との違いについて分析している。Jean-Paul SARTRE, *Baudelaire*, coll.«idées N.R.F.», n° 31, Gallimard, 1963, pp.199-201を参照。なお、本文中に引用するページ数は同書によるものである。また、邦訳に関しては、『ボードレール』, 佐藤朔訳, 人文書院, 1956年を参照しつつ、筆者が訳出したものである。
- ⁹⁾ ポーヴォワールは当時のサルトルについて、「依然として弁証法的な思考法に達していなかった」と証言しているが (Simone de BEAUVOIR, *La Force des choses*, Gallimard, 1963, pp.56-57), それは作品のこうした性質に由来するものであろう。
- ¹⁰⁾ 用語としてのアナフォルの射程は非常に広いが、ここにおいては, Michèle PERRET の定義 (Cf. *L'Énonciation en grammaire du texte*, coll.«lettres 128», Éditions

Nathan, 1994, pp.64-67) 及び, Patrick CHARAUDEAU (Cf. *Grammaire du sens et de l'expression*, coll.«Éducation», HACHETTE, 1992, pp.223-224) の分類に従う。但し, コルブランは「anaphore」と「référence nominale」を区別し, われわれがアナフォーラと呼ぶような場合を後者に分類している (Cf. Francis CORBLIN, *Défini, indéfini, démonstratif*, Librairie Droz, Genève-Paris, 1987. 特に pp.9-10 を参照)。

¹¹⁾ SARTRE, *op.cit.*, p.91 : «On conçoit à présent qu'il [=Baudelaire] veuille des juges sévères : l'indulgence, la tolérance, la compréhension, en le faisant moins coupable, affaibliraient d'autant sa liberté. Le voilà donc pervers.»

¹²⁾ *Ibid.*, p.60 : «On accusera certainement son éducation chrétienne. Et sans doute cette empreinte l'a-t-elle [=Baudelaire] fortement marqué. Mais voyez le chemin accompli par cet autre chrétien — protestant, il est vrai — André Gide.»

¹³⁾ SARTRE, *L'Être et le néant*, coll.«Bibliothèque des Idées», Gallimard, 1943 (éd. de 1970), p.456. 実際にサルトルは本文中で「mauvaise foi」という語を用いてボードレールの意識を説明している。SARTRE, *Baudelaire*, p.101 及び次注を参照。

¹⁴⁾ 概念としての「mauvaise foi」については, SARTRE, *L'Être et le néant*, pp.82-107, 特に p.104 以降を参照。またサルトルは実際に, 本文中で「mauvaise foi」という言葉を用いて, ボードレールの意識を批判している。(Cf. SARTRE, *Baudelaire*, p.104.)

¹⁵⁾ SARTRE, *Baudelaire*, p.23 : «[...] : l'enfant vient d'acquérir la conviction qu'il n'est pas n'importe qui, or il devient précisément n'importe qui en acquérant cette conviction. Il est autre que les autres, cela est sûr; mais chacun des autres est autre pareillement. Il a fait l'épreuve purement négative de la séparation et son expérience a porté sur la forme universelle de la subjectivité, forme stérile que Hegel définit par l'égalité Moi=Moi.»

¹⁶⁾ *Ibid.*, p.62 : «C'est au sein du monde établi que Baudelaire affirme sa singularité». 「予め作られた世界」«monde établi」とは, サルトルによれば, 他者によって作られボードレールにとってその価値が絶対的な「善」であるような世界をいう (Cf. *ibid.*, p.73 : «On retrouve dans ce passage [des *Fusées*] l'affirmation obstinée d'un ordre de fins préétabli et Baudelaire y rêve une fois de plus son désir d'être inséré dans cette hiérarchie par le regard d'un Créateur.»)。

¹⁷⁾ *Ibid.*, pp.70-71 : «S'il [=Baudelaire] doit être absolument coupable, si sa singularité doit être *métaphysique*, il faut qu'il y ait un Bien absolu. [...] Il se confond avec un regard. Un regard qui commande et qui condamne. [...] pour lui ce n'est pas loi qui est première, c'est le juge. Après cela le regard qui le transperce, qui le remet à sa place et qui "l'objective", le grand regard "porteur de Bien et de Mal" est-il celui de sa mère, du général Aupick ou de Dieu "qui voit tout" ? »

¹⁸⁾ *Baudelaire* に引用されているなかでは, 自殺を予告する母への手紙 (pp.34-35), Ancelle との仲違いを報告する手紙 (pp.40-43), 借金の増大を告げる手紙 (p.112)

などが挙げられる。

¹⁹⁾ *Ibid.*, pp.92-94. サルトルは、ボードレールにおける「快楽」«volupté»の概念との関連においてこの点を分析している。

²⁰⁾ *Ibid.*, p.87: «Faire le Mal pour le Mal c'est très exactement faire tout exprès le contraire de ce que l'on continue d'affirmer comme le Bien. C'est vouloir ce qu'on ne veut pas — [...] — et ne pas vouloir ce qu'on vuet [...]»

²¹⁾ *Ibid.*, p.104: «Et sans doute, par-delà le péché à présent, la punition vise-t-elle bien plus profondément, bien plus obscurément cette Mauvaise Foi qui est sa véritable faute, dont il ne veut pas convenir et que pourtant il cherche à expier. Mais c'est vainement qu'il tente de franchir le cercle vicieux où il s'est enfermé: car le bourreau est d'aussi mauvaise foi que la victime; [...]» (強調筆者) さらにサルトルは、p.78においても、「cercle vicieux」という言葉を用いて、ボードレールがアカデミー・フランセーズへ立候補した際の態度について批判している。

²²⁾ Charles BAUDELAIRE, XI (19) «Mon Cœur mis à nu», in *Mon Cœur mis à nu*, dans *Œuvres complètes*, tome I, coll.«Pléiade», Gallimard, 1975, pp.682-683. (サルトルにより *Baudelaire*, p.45 と p.88 に引用。)

サルトルが二度にわたってボードレールのこの句を引用しているのは興味深い。作品中には、当然、ボードレールの書簡や作品が数多く引用されているのであるが、その中で二度にわたって引用されているのは、この *Mon Cœur mis à nu* からの一節のほかには、二つしかない。指摘するだけにとどめるが、一つは *Les Fleurs du mal* の XI. «Le Guignon» (Cf. BAUDELAIRE, *ibid.*, p.17) からのもので、それぞれ p.220 と p.225 とに «Mainte fleur épanche à regret / Son parfum doux comme un secret / Dans les solitudes profondes» という詩句の一節が引用されている (但し最後の一詩行は p.225 の引用からは削除されている)。もう一つは *Fusées*, XI.(17) (Cf. BAUDELAIRE, *Fusées*, XI (17), in *Journaux intimes*, dans *ibid.*, p.660) からの引用で、*Baudelaire* の p.66 と p.108 とに、«Quand j'aurai inspiré le dégoût et l'horreur universels, j'aurai conquis la solitude.» という一節が引用されている。

²³⁾ BAUDELAIRE, «L'Héautontimorouménos», in *Les Flerus du Mal*, dans *ibid.*, p.79. (*Baudelaire*, p.31 に引用。)

La Stratégie sartrienne dans le *Baudelaire*

Shinya SHIGEMI

Après deux publications fragmentaires, le *Baudelaire* de Sartre, qui est proposé au public comme introduction aux *Écrits intimes* de Baudelaire, se situe dans la pratique inaugurale de la «psychanalyse existentielle», telle qu'elle apparaît dans son *Être et le Néant*. Bien que des critiques comme G. Blin, G. Bataille et M. Blanchot attaquent violemment son point de vue trop moralisateur, elle joue un rôle assez important dans l'étude de Baudelaire. Nous allons donc étudier ici, tout en admettant ces critiques, comment le philosophe dénonce le poète, de quelles manières et avec quelle stratégie.

Sartre nous a projeté, dès le début de l'œuvre et par sa propre intuition, une image toute faite du «poète maudit» à partir d'une «idée reçue»: «Il n'a pas eu la vie qu'il méritait». L'énumération des expressions: «cette mère, cette gêne perpétuelle, ce conseil de famille, cette maîtresse avaricieuse, [et] cette syphilis», la suite des expressions anaphoriques comme «ce pervers», «ce raffiné», «ce solitaire», «cet apologiste de l'effort», et la répétition de l'adjectif «fameux», tous ces éléments, soit qu'ils affirment l'«idée reçue», soit qu'ils la contredisent, ont un rôle stratégique dans l'œuvre qui consiste à évoquer, chez le lecteur, une image de Baudelaire largement répandue à l'époque.

Or, le poète qui est décrit ainsi se caractérise dans l'œuvre de Sartre par son antinomie entre le «Bien» et le «Mal». «Se sent[ant] destiné à la solitude», au nom de quoi il exige d'être puni, Baudelaire cherche toujours le «regard absolu» des Autres, qui est le «Bien», afin d'affirmer sa «singularité», sa «culpabilité» et son «Mal». En effet, il essaie de «violer» sa déesse absolue, Mme Aupick, en lui adressant des lettres atroces pour elle. Bien qu'il obtienne ainsi sa chère «singularité =Mal», le poète de la «lucidité» ne se satisfait jamais de ce qu'il reçoit passivement, d'autant plus qu'il s'efforce de reprendre sa liberté d'être «coupable». Cependant, il ne reçoit ce qu'il cherche qu'au moyen des Autres. Voilà l'image baudelairienne du «cercle vicieux». Le titre «*Les Fleurs du Mal*» qu'il donne à son œuvre poétique témoigne, d'ailleurs, de cette attitude baudelairienne.

Pour réaliser son but de montrer un Baudelaire divisé, Sartre recourt donc à la deuxième stratégie qui contredit la première. Chaque expression anaphorique est filée jusqu'à ce qu'elle constitue une contradiction dans une même phrase. En tant

que «raffiné», Baudelaire «fréquente les prostituées les plus misérables»; bien qu'il soit «apologiste de l'effort», il est «incapable de s'astreindre à un travail régulier»; il est un «pervers» qui a «adopté une fois pour toutes la morale la plus banale». Ainsi Sartre a-t-il l'intention évidente de décrire le poète en évoquant l'image du «cercle vicieux» dans laquelle il s'efforce d'incorporer l'antinomique.

En imposant au lecteur une image préfigurée par son intention, Sartre nous reconstitue le poète pris entre deux valeurs antinomiques à travers l'image du «cercle vicieux», en même temps qu'il détruit cette stratégie initiale. D'où ces expressions qui apparaissent à la fin de l'œuvre: «en même temps» et «à la fois». On peut certes considérer cette attitude sartrienne comme son intention cachée d'esquisser une morale, mais elle consisterait plutôt à démythifier le cliché du «poète maudit».